

板垣洋行問題と新聞論争

田 中 由貴乃

〔抄 録〕

自由党総理板垣退助は、明治十五年末から翌年六月にかけ、フランスをはじめとするヨーロッパを巡見した。八年後に迫った国会開設を控えて、先進諸国の実情を視察するためであった。

しかし、その時期や、費用の出資者をめぐり、先ず党内の反対派から疑惑が指摘され、内訌を招き、自由新聞からも馬場辰猪らが退社する結果になった。さらに、紛争は党外にも飛び火し、改進黨からも批判を浴び、自由党との間に、それぞれの機関紙上で、論争が展開した。

本稿では、以上の紛争と新聞論争の実態を明らかにしたい。

キーワード 板垣退助、自由党、自由新聞、改進黨、東京横浜毎日新聞

はじめに

明治15 (1882) 年11月、板垣退助は、後藤象二郎・今村和郎・栗原亮一とともにヨーロッパに出発する。この洋行の目的は、同23年に控えた国会開設に備えて、西洋の議会制度を視察するためだというのが、費用の出処や目的、時期について党内外から疑惑が起こった。

板垣洋行問題に関する先行研究には、尾佐竹猛「政治史の一節—板垣洋行問題—」⁽¹⁾ (1933)、彭澤周「板垣退助の外遊費の出所について」⁽²⁾ (1964)、平井良朋「板垣退助欧遊費の出資者に就いて」⁽³⁾ (1968)、寺崎修「板垣退助の外遊と自由党」⁽⁴⁾ (1985) があり、板垣の伝記⁽⁵⁾や近代史・憲政史関係の書籍でも触れられている。

尾佐竹は、板垣の洋行は政府による懐柔策であり、洋行費が陸軍の利権の見返りに三井から支払われたものであると述べ、この説が高校教科書などで採用されている。

平井は、世間から洋行費についての疑惑を受けた板垣は、大和の豪農土倉庄三郎から全額の援助を受け、後藤もそれに従った。しかし、同時に政府の斡旋した三井の資金も受け取った後藤は、板垣共々政府出資の費用で洋行したと見せて板垣や政府を欺いていたと述べた。

寺崎は、「土倉庄三郎が板垣に外遊費を提供したことを立証する資料がすでに土倉家より発見されている事実」を軽視すべきではないとし、「井上馨のあっせんにより三井から後藤象二

郎に提供された第一のルートと、大和の土倉庄三郎から森脇直樹を通じて板垣に提供された第二のルート」が存在したと述べている。

先行研究が述べるように板垣の洋行費用が政府経由で出たものということは、当時から取り沙汰されていた。このため、改進黨の追及を受け、新聞紙上で論争となるのだが、論争自体を論じた研究はされていない。その点を踏まえ、本論文では、板垣洋行に関わる内証や論争の実態を明らかにしていきたい。

第一章 板垣の洋行

1. 計画の発端

『続伊藤博文秘録』⁽⁶⁾に収められている、憲法調査のため渡欧中の参議伊藤博文がベルリンから、オーストリア特命全権公使上野景範へ送ったと考えられる書簡草稿には、板垣が明治15年3月頃、伊藤を訪ねたと、板垣の洋行のきっかけともとれる内容が書かれている。

後藤板垣等來欧ノ報ヲ得タルハ頗快事ヲ覚フ、今春本邦ヲ辞去スルノ前一日、板垣突然來リ、彼レカ意衷ヲ吐露シテ曰ク、縦令世ニ容レラレサルモ、自カラ信スル所ノ者ヲ信シテ斃レン而耳ト、小生之ニ答ヘテ曰、終生一身ノ節義ヲ守ルヲ事トシテ、敢テ他人ノ事ニ関与セサル者ハ然ルモ可ナリ。然レトモ其目的トスル所、苟モ世ヲ益シ、国ヲ利シ、衆人ノ先覺タラント欲スル者ハ、事国家衆庶ニ関ス、必スヤ其學問衆ニ先ンスル所ナカル可カラズ、而シテ小生ガ所謂學問トハ、徒ラニ書ヲ讀ミ、文ヲ解スルノ謂ニ非ス、足下已ニ衆庶ノ先覺ヲ以テ自カラ任シ、人心ヲ鼓舞シテ興起スル所アラシメント欲ス、奚ソ親カラ歐洲ニ遊ヒ、其古今ノ沿革ヨリ、政治人情風俗教化ノ基ク所ヲ推窮セザル、今日ノ風潮世ヲ拳ケテ欧ヲ模擬セントス、而シテ其實況ニ通セザル者、或ヒハ知ラスシテ衆ヲ誤ル者ナキヲ保セスト、彼頗ル鄙見ヲ領容セルガ如シ、是小生ガ彼ト一夕談話ノ大意ナリ。

或ヒハ小生カ彼等ヲ籠絡シテ、欧州ニ釣リ出シ、他日政府ノ困窮アルニ際セハ、彼等ヲ使役シテ、官民ノ調和ヲ謀ルノ具ト為サントスル計略ナリト、誣言ヲ造為シテ世ヲ惑サントスル徒アルヲ聞ク、小生固ヨリ意ニ介スル所ナシト雖モ、人情世態ノ如斯ハ真ニ可憂コトナリ。豈只是レ而已ナランヤ。豈只是レ而已ナランヤ。

これによると、伊藤が欧州へ出発する前、突然板垣が訪ねてきて「意中ヲ吐露」し、伊藤はこれに答え、「衆人ノ先覺タラント欲スル者ハ、事国家衆庶ニ関ス、必スヤ其學問衆ニ先ンスル所ナカル可カラズ」と洋行を勧め、板垣も納得したという。

徳富蘇峰は後年「読売」に連載した「三代人物史」で、突然の板垣来訪の理由を、「3月13日には岩倉右大臣が、酒肴を携え送別のため、伊藤邸に来訪しているから」3月14日の2日前である3月12日に「板垣も亦送別の意味にて赴いたかもしれぬ。…伊藤が板垣を招かざるも、誰かが伊藤の意を以て、板垣に水を向けたるか、或は板垣自身の発意」かと、板垣に洋行への下心があったのではないかと推測している⁽⁷⁾。しかし、伊藤は元々9日出発予定であり、伊

藤の送別会も6日、延遼館で行われているので、12日に伊藤に会いに行くのでは遅い。また板垣自身も3月10日に東海道遊説に出発している。たとえ9日以前であっても、遊説出発を控えた自由党総理板垣が参議の伊藤を訪ねることは不自然である。

よって、出発前の伊藤を訪ねたのは、板垣ではなく後藤であると考えられる。後藤が板垣が東京を発つ10日以前に伊藤と面会していたことは、右大臣岩倉具視が伊藤に宛てた書簡中に「板垣、後藤の如きも貴卿発足前、後藤より申入候秘密之挙、多分被行候模様。委曲は井上馨より御承知と存候」⁽⁸⁾と見え、また外務卿井上馨が伊藤に宛てた書簡にも、「板垣下坂之前」後藤は「伊藤までは金策出来候は、跡より欧行可致段、相約し置」⁽⁹⁾と、金策さえ整えば洋行するかと、板垣の意思を確認したとあることからもうかがえる。

おそらくこの洋行計画は、後藤が伊藤と面会し、「秘密之挙」である洋行計画を打明け、板垣を説得したことから始まったのだ。後藤は伊藤と金策が出来次第、板垣を連れて洋行すると約束し、板垣の説得にあたった。板垣は洋行について深く考えている様子が見えず、費用が準備できれば同行すると承諾したにすぎない。後藤の方では30日以内(3月～4月)に洋行へ出発する予定で、「至急板垣を東京え呼登せ候上にて、屹度連出し可申」⁽⁹⁾と井上に話していた。しかし板垣にも後藤にも自らの洋行費を支弁するだけの財力はなかった。そこで、欧州へ発った伊藤に代わり、井上が金策に動いた。井上が三井を通じて洋行費用を用意した経緯は、尾佐竹以来明らかにされているので省略する。

後藤は「今度の洋行の主意は洗濯積りに而、帰朝の上は官途に就かんとの下心」⁽¹⁰⁾があり、費用とポストを条件に板垣を連れ出した。実際に改進黨の小野梓が、板垣と副島種臣入閣の噂を人伝に聞いて、「唯板垣・副島之二氏、為井上所籠絡、好失名望」と答えており⁽¹¹⁾、この時期井上が板垣・副島を籠絡して復職させるという噂があったようだ。

帰国後の後藤には参事院議長就任の噂(16年7月4日「読売」)があり、16年10月25日、現職の山県有朋から「親睦の宴」に招待されていたという(明治16年10月27日「読売」)。しかし、後藤は政府に戻らなかった。16、7年は在野で朝鮮の独立運動に関与し、18年には高輪に新邸を建てている。

また今村は井上が選んだ同行者で「減多な者を附置候而も却て害をなし不都合」なので、「同人なれば適當と思考し同行」させ、今村の留守宅へは「内密毎月百円宛給与」が支払われていた⁽¹⁰⁾という。

II. 自由党の内訌

① 7月の内訌

おそらく6月中旬頃、金策の目途がついた後藤は、6月1日に帰京した板垣に早急の出発を提案した。このとき後藤は費用について、蜂須賀茂韶から借受けると説明したのだろう。板垣は、機関紙も出来、党の体制も整ったので、金さえあればと承諾した。そして後藤は今村和郎

を、板垣は栗原亮一を随行とすることを決めたが、板垣は洋行についてはしばらく党員の様子を見る必要があると思い、後藤と「誓て不漏他人」よう約束した。しかし、後藤は洋行のことを小島竜太郎に漏らしてしまい、さらに小島から中江兆民に漏れ、7月初旬、中江は「酔に乗、自由新聞に於て彼之兩人洋行之事を謂出」してしまう。板垣は7月9日後藤を訪ね、「未党へも一言も不申出處へ、此事発覚してハ甚不安、然共其節は坐中一同充分不感模様にて甚仕合也」、そしてこれ以上漏れぬよう小島に忠告するように言った⁽¹²⁾。

「彼之兩人」という表現から、兆民の口から漏れた洋行する二人とは、板垣・後藤ではなく、今村・栗原を指すと考えられる。おそらく中江と親しい今村⁽¹³⁾・栗原の二人（もしくは自由党員の栗原のみ）に、洋行について問い詰めた程度であったのだろう。党員はまさか板垣・後藤が洋行するとも知らず、今村・栗原がそれに同行すると思わなかったので、「坐中一同充分不感模様」であったのだ。

7月初旬、兆民が酒の席で今村・栗原の兩人の洋行を暴露した辺りから、徐々に板垣と後藤の洋行が噂され、板垣らは7月ごろには打ち明けざるをえなくなってしまうのではないか。そして7月中旬、一度目の内訌が起こる。『自由党史』によると、板垣・後藤の洋行を知った自由党常議員馬場辰猪・幹事大石正巳・自由新聞記者末広重恭（鉄腸）の三人は異議を唱え、板垣を訪ねたとある。

馬場らは「今や我党は船体纔に成りて、将に港を出でんとする者の如し。此時に当り船長なくんば、何を以て其進行を始むべき。」と板垣に迫り、洋行に反対した。それに対し、板垣は「予の外遊を計る、其理由決して二三に止らず、而して皆な一身の故に非らざる也。今日党事略ぼ整ひ、同志咸く奮励す。予在らずと雖も、必ずしも進行を沮害する憂を見ず。況や事に任ずる諸君在る有り。機を論ずれば今日を措いて他あらず。蓋ぞ予に假すに僅々一年の時日を以てせざると。」と反論し、馬場らは不服ながらも、抗弁せず引き退がったという⁽¹⁴⁾。

しかし、安永梧郎『馬場辰猪』によれば、自由党を船に例えて反対したことは『自由党史』と同様だが、馬場が「言葉を尽して之を止むるも、総理は之を容れず、帰京の上にて取計ふべき由を述べ、相談半ばに其儘函根に立去」ったという⁽¹⁵⁾。

実際に板垣は7月に箱根へ向かっている。7月19日付の「朝野」に、丸山作楽が板垣に面会を求めたが、板垣が「不日温泉に趨」くので延期になったとあり、また徳富蘇峰が8月2日、箱根に滞在中の板垣と面会したという。蘇峰によると、板垣は当時禁猟期間であったにも関わらず、狩りに出かけており⁽¹⁶⁾、この箱根行きは休息のためであったようである。

②9月の内訌

7月の内訌はうやむやに終わったが、9月7日にまたも内訌が起こる。馬場・大石らは板垣の洋行に反対し、板垣の寄寓する後藤の邸へ押しかけ、「段々論議の末板垣洋行の事を否決」した。この時の内訌は、大石の回想（詳しい日時は明らかではないが、状況から9月7日と思

われる)によると、

馬場、末広と三人で、板垣に逢つたが、要領を得る筈がないのぢや、吾々は船が出来て、今正に出帆せんとするのぢや、その時に船長を失ふたら、船の針路を誤る事はわかりきつて居る、そう云ふ筆法で猛烈に肉迫したものサ、処が板垣は党制既に整ひ、党员また振ふ、もうこの儘で、ワシが暫らくの留守になつたとて、難はない……と云ふ一点張りぢや、そうなる旅費の出処を詮議せにやならぬ、そんな事はコチ等の本意ぢやないのぢやが、板垣があまりに頑固で、わからぬ事ばかり云ふから、本意でない事までもせにアならぬ様になりよつたのぢや

という様子であった。大石が、洋行費について後藤を詰問すると、蜂須賀茂韶から借受けたというので、直接蜂須賀に確認しに行ったところ、後藤の嘘が発覚した⁽¹⁷⁾と語っている。

板垣は馬場らに迫られ、「太た躊躇し、遂に洋行を思止まらん」としたが、後藤は「元来此の事は、己れの胸中に在る事にて、行かんと欲すれば止るべく、敢て他人の可否決を取り、進退を決するが如き事にあらず、尤も今日洋行の事は、必ず停められぬと申す儀は無之候へとも、党员の否決に依て躊躇するは不可解事也」と板垣を説得し、板垣は「断然洋行に決し、自由党の総理を辞し、且該党を退く事に決心」した⁽¹⁸⁾。

後藤に金策を任せた板垣は、費用の出所については何も知らなかった。後藤が「板垣之手前ニおゐて、実ハ政府之金なる様露候而者、忽異議相起り可申」⁽¹⁹⁾ため、隠していたからである。板垣は本当に蜂須賀から借りた金だと信じ、後藤に押し切られ洋行を承諾したのだが、馬場や大石が洋行費の疑惑を突きつけると不安になった。

板垣は馬場らの反対で後藤の準備した洋行費が怪しいものであると気付いたが、後藤に党员から反対されて中止するのは道理ではないと押し切られ、今更洋行の中止も出来なくなってしまったので、党员へ費用の潔白を証明するため、後藤が用意した疑惑のある金を避け、自ら費用を準備しようと大和の豪農土倉庄三郎を頼った。土倉から援助の約束を取り付けた板垣は、洋行費問題は解決し、党员も納得すると思ったのだろう。9月14日、土倉へ礼状⁽²⁰⁾を書いた板垣は、洋行日程を決定し、外務省へ海外旅券発行を出願した。そして翌15日に、9月22日の出発を公表した。しかし、まだ馬場らは承服せず、再び内訌が起こる。

板垣が洋行の出発日を公表した2日後の17日、馬場らは東京旧地方部員を招集し、日吉町の旧共存同衆館で臨時会を開催し、板垣外遊の可否を議論した。翌18日、暇乞いのため参内した板垣は、帰途自由党本部寧静館へ立ち寄ると、再度馬場らに洋行について問い詰められた。板垣はその場は馬場らを抑えて取めたが、翌日後藤や大井憲太郎を集め会合を開いた。19日の議論は激しいものとなり、当時隣室にいた伊藤痴遊が、後に「大石が板垣と論争した結果が、互いに罵詈雑言で大石が新聞挟みを取つて板垣に打つて掛つた」「なかへあの内争といふものは苛烈なものだつた」⁽²²⁾と語るほどである。

結局、板垣は洋行の意志を曲げることはなく、板垣と対立した馬場・大石・末広の処分を巡

り、9月21日地方委員を招集し、自由新聞社改革について臨時会を開催した。数日にわたる会議の結果、9月30日に大石が、10月2日馬場・末広も辞表を提出し、三人は自由党役員・自由新聞社から退いた。また、馬場らの欠員を埋めるため、常議員には島本仲道・林包明・河野広中が就任し、板垣洋行中の自由党総代理は島本に決まった⁽²³⁾。

III. 洋行の決行

9月の内証や自由新聞社の改革のため、板垣らは出発予定日であった9月22日を、30日に延期することになった。板垣はすでに9月18日に参内を済ませていたので、26日には改進黨紙に反論する意味もあり、洋行趣旨を「自由」に掲載した(後述)。しかし、28日後藤が金銭トラブルにより告訴され⁽²³⁾、さらに10月2日板垣が吐血し(10月5日「毎日」、またも洋行は延期となった。

板垣の病状は「板垣洋行ニ付、出費一件ヨリ種々異論有之趣…右ニ付、板垣モ殊ノ外苦慮致シ、夫ガ為歟、過日ハ意血ヲ吐キ候由、尤モ出血ハ快方ナレ共、脳症相発シ」⁽²⁴⁾たということである。帰国後の自由新聞は「脳充血」(16年6月23日「自由」と書いているが、主な症状が吐血・眩暈・卒倒⁽²⁵⁾であることから、脳が直接の原因とも思われず、胃潰瘍による吐血から、脳充血と症状の類似する脳貧血を併発したのかもしれない。正確な病名などは明らかではないが、この洋行を控えた時期に、急に吐血を伴うほどの病に罹った板垣には、多大なストレスがあったことが想像できる。

板垣はベルツの治療を受け、10月20日には快方が報じられ(「朝日」、23日中村楼での送別会に出席した。そして、板垣は11月11日午前7時、汽車で東京を発ち、9時に横浜を出港し、ヨーロッパへ向かった。

洋行中の板垣の様子について、16年6月20日付の「自由」に掲載された恐らく栗原がロンドンから送った書簡には、「板垣総理には、本年一月巴里に着せられたる以来、何か後藤氏と意見の合わざる事ありて、其交りも殆んど前日の如きに非らず。其の寓居を同じくせられたるの日なども甚だ少な」くなくなったとある。

また板垣に同行した栗原はのちに、洋行中のことについて酒の席で伊藤痴遊に、「どうも実に苦しかった」「何が苦しい」「第一流のホテルに泊れぬから三流のホテルだよ」と苦笑し、旅費には困ったと漏らしていた⁽²⁶⁾という。改進黨の矢野文雄も「板垣さんは何でも旅行さきで大分不自由された」と云うことである。出発前に攻撃もあつたので出所のあやしい金も受けずに、自分の手一杯で万事済まされたから始終困られたらしい。見るに見かねて伊藤さんも何とか援助しようと言われたぐらいであって、伊藤さん随行の若手の役人等も、板垣さんの困難されたことを話して気の毒がついていた。」⁽²⁷⁾といている。実際に板垣はフランスで西園寺公望に援助を求めていたようで⁽²⁸⁾、洋行先で金銭的に困窮していたことは事実のようだ。

恐らく板垣と後藤の洋行費は、同一ではなく、別のものであったのだろう。後藤は政府の金

を使い、板垣は後藤に頼らず、自分で集めた金を使うことにしたのだ。後藤は政府から十分な援助を得たので、今村を連れ一流のホテルにも泊まれたが、板垣は満足な滞欧費を得られず、栗原と三流のホテルに泊まることになり、後藤と寓居や行動を別にせざるをえなかった。

しかし後藤の用意した金を避けるために頼った土倉からの資金が、板垣の手元に届いたという確証はない。ベルリンで後藤に面会した伊藤は、「後藤板垣等も^(マ)戸倉ノ金五千元ヲ、岡本其外ニ被押、為換無之為メニ大困窮」⁽²⁹⁾していたと井上に書いている。この5000円はなんらかのトラブルにより、欧州の板垣まで届いていない可能性がある。土倉の援助でなければ、おそらく板垣は自費（遭難時の見舞金も多額に昇った）⁽³⁰⁾か、あるいは借金⁽³¹⁾か、山内家を頼る⁽³²⁾か、何等かの方法で自分と栗原の洋行費を用意する他なかったであろう。

第二章 洋行をめぐる論争

1. 発端

明治15年9月8日、今村和郎は内務省権大書記官兼参事院議官補を辞職した。翌9日「報知」（改進黨系）は、雑報欄に今村の退職は「後藤象二郎・板垣退助の両君と共に、近々洋行さるゝためなりと聞く」と洋行の噂を取上げる。

「報知」の記事を受けた「毎日」（改進黨系）は、10日の雑報欄に、次の記事を掲載した。

○一昨八日の太政官録事欄内に掲記したれば、読者諸君は定めて諒知せられしならんが、内務権大書記官今村和郎氏は、去る七日を以て其職を解かれたり。偕て氏は、夙とに仏國に留学し、帰朝の後某参議の推薦に依りて奉仕の身となられしより、政府の信任も厚く、為に要務に与られしの間へも高かりし。去ればにや民権論者中一時錚々の名もありたる彼の西國寺公望氏の如きも、今村氏の説論に拠りて奉職せらるゝ事には至りたりと聞き及びぬ。氏の経歴は斯の如くなるに、今回突然辞職の事ありたるより、世人の人は種々の臆想を為し、或は曰く、官権新聞其人に乏しきが故に、官を去つて操觚に従事し、旗幟を官権壇上に樹つるなりと、或は曰く、身を政事浪瀾の局外に置いて、著書出版の業に就くなりと、諸説紛々、余輩未だ其孰れか真なるを知らざりし。而るに昨九日の報知新聞に拠れば、氏は板垣退助、後藤象二郎の両君と俱に欧州を巡遊せらるゝと見へたり。此事若し果して真ならんか。余輩少しく疑ひなき能はず。氏が従来の経歴を觀るに、板垣、後藤の両君とは、其県地こそ同じけれ、親密の交際ありたる人とも思はれず、寧ろ長藩貴顯の眷顧を得られるやの方ならん。況んや欧州巡遊の如き其費へ巨万なるべければ、如何なる人たりとも容易に之を支弁し難からん。或は謂ふ、伊藤参議欧州に滞在せらるゝが故に、氏は彼地に赴かるゝには非ざる歟と。如何のものにや。

この記事から改進黨の最初の疑惑の対象は、政府や伊藤と関わりの深い同行者・今村であったことが分かる。費用に関しては「欧州巡遊の如き其費へ巨万なるべければ、如何なる人たりとも容易に之を支弁し難からん」というのみで、これも今村の問題として書かれている。

ところが16日「団珍」の風刺画「旨い露 水火の戦い」(図)、24日「毎日」社説「板垣君ノ洋行」では板垣に対する中傷が本格的になり、両紙(誌)には、同行者だけでなく、費用の問題が大きくとりあげられることになる。

「団珍」は明治15年には年間5万部を発行した隔週～週刊の改進黨誌⁽³³⁾で、記事は総ルビ・会話文で書かれており、読者層は小新聞と同様である。発行形態や読者層の違いからなのか、自由党系大新聞「自由」は「団珍」の記事には触れていない。また改進黨系の新聞も「団珍」に触れている気配はない。



しかし、「団珍」は板垣の洋行・自由党の内訌に関わる風刺画を四枚、また記事や戯文も掲載しており、自由党の内情や洋行の背景をかなり詳しく書いている。

10日の記事が書かれたと考えられる9日か10日から24日までの間には、自由党では内訌が起り、自由新聞社改革の会議が行われている。また21日には「毎日」社主沼間守一が「朝野」(改進黨系)社主成島柳北と、島本仲道を訪ね、馬場・大石を改進黨へ移動させる交渉をしに行っている⁽²³⁾ので、この2週間の間には多くの情報が漏れたのか、「団珍」が風刺画を掲載してから一週間の差があることから、何か確証になることを掴んだのかもしれない。小野秀雄『日本新聞発達史』によると「当時の或書物」に「最初毎日と報知とは板垣の事を書かぬ約束」があったが、何故か沼間がその約束を破ったと書かれている⁽³⁴⁾という。

沼間の主宰する「毎日」が9月24日掲載した社説「板垣君ノ洋行」は、板垣の洋行は「怪異ニ勝ヘザル者」で「君ガ費金支弁者ノ誰タル事ヲ公示スルノ遅キト、君ノ地位ト、今ノ時機ト并ニ同行者ノ履歴トニ因テ、遂テ世ノ人ヲシテ君ガ欧遊ノ事ニ関シテ疑ヲ懐カシメ」(10月8日「毎日」)たと①費用(出資者)②趣旨(時期)③同行者の3点の疑惑を挙げている。また板垣の洋行に、反対党である帝政党が「西遊ノ事アルヲ聞キ、大ニ随喜スル所ナリ」(9月30日「日日」)など賛辞を送り、改進黨の攻撃を受ける第4の疑惑となった。

(表・末尾に掲載)は各政党機関紙が報じた板垣洋行関係の記事・社説の一覧である。

II. 費用(出資者)

「毎日」は、板垣は「財計ニ優ナル人ニアラズ、其困厄ナルヲ以テ廉節ヲ世ニ証セラル、」人物であり、また自由黨員にも余財はなく、この洋行にかかる巨万の費用の出所は、「今ニ至リテ、其出所ヲ明知スル能ハザルノミナラズ、却テ或ハ華族某氏ニ出ルト云ヒ、或ハ豪商某氏

ニ出ルト云ヒ、或ハ豪農某氏ニ出ルト云テ、遂ニ雲煙ノ間ニ在ル者ハ何ゾヤ。豈其間言フ可ラザル者アリテ存スル乎」と、費用の出所についての疑惑を指摘した(9月24日「毎日」)。

この疑惑に対し自由党側は、費用の出所は板垣の演説や「自由」社説(9月26日「欧州漫遊ノ趣意書」に土倉出資と説明)でも説明したので明らかである。「弊社長の路費の如きも、偶然天上より墮ち降りたるにも非ず、然れども国事叛の首切料として獲たる三千円にも非ず、彼の某氏が発したる檄文に掲げし所の公債証書にて獲たる金にも非ず、常平局の職権を左右して獲たる金にも非ず、或る会社へ特別保護を与へて獲たる金にも非ず」と、江藤新平の処刑を大久保利通から千両受取って言い渡したと噂されていた改進黨副党首の河野敏謙と、元大蔵卿で三菱を保護し見返りに援助を受けていると噂されている党首大隈重信を暗に中傷し、板垣の洋行費の疑惑を攻撃し、非難することは、自由党を弱体化させ、改進黨を振興させるための卑怯な策であると反論した(9月29日「自由」)。

改進黨の主要人物を暗に誹謗され、改進黨紙「報知」は「自由」が「不埒至極なる慢言を吐き並べ、人も無げなる挙動を為」すと「毎日」とともに反論を始める(9月30日「自由」)。それに対して「自由」は、紙上に述べたことは世間の人々が皆知るものであり、明白に改進黨中の人物の氏名を指していないのに、「報知」記者は自ら党中の主な人物という。改進黨員に、このような後ろめたいことが無ければ、なぜここまで必死に弁解するのか(9月30日「自由」)と返し、費用の問題はお互いの総理や党の中傷に発展した。

III. 洋行の趣旨(時期)

「毎日」は、板垣が「政治社会ノ最モ繁劇ナル時期」に「自由党総理タル者ハ、畢生ノ力ヲ出シテ其ノ党ノ主義ヲ拡充シ、以テ黨員推薦ノ意ニ応ズベキナリ。然ルニ何ノ暇アリテ海外ノ遊ヲ為スノ閑日月ヲ有スル乎」また「政体ノ調査ノ如キハ、多年ノ研磨ヲ要スル者ナリ。豈ニ之ヲ一時ノ漫遊ニ得ベキ者ナランヤ…君ガ言語不通ノ歐洲ニ遊デ得ル所、亦知ルヘキノミ。洋語ヲ解シ、洋書ヲ誦シ、歐洲ニ遊学シ、文芸ヲ修メタル者、自由黨員中其人ナキニアラズ。若シ此等ノ人ヲシテ、書ニ拠リ、文ニ徴シテ調査ニ従事セシメバ、憲法ノ考究ノ如キハ、君ガ遊歐シテ得ル所ニ倍蓰セントス」(9月24日「毎日」)と指摘し、これに対し板垣は、「欧州漫遊ノ趣意書」として、以下

- ①自由主義を懐く人々にとって今は実力を養うとき。農業に例えれば収穫を待つときであり、今が洋行の時期である。
- ②下野以来、知識人や論客と議論し、自由主義の理論を理解したが、実際に欧州を見ていない。
- ③自由党は公道を踏むものであり、世界の評価を得なければいけない。
- ④政府や貿易で外交が始まって久しいが、国を超えた民間同士の交際はない。
- ⑤国会開設に臨み官吏が渡欧。憲法の利害を検討することは自由党のつとめ。そのために

実地の研究・検討が必要。

五点を挙げて答えた(9月26日「自由」)。

また「報知」は洋行費に関しても、種々の議論があり、自由党の主要な30余名も「報知」記者と同様の意見書を提出しているの見合わせるべきである(9月29日「報知」)という。「自由」は、これは「報知」記者が針小棒大に報じただけ(9月30日「自由」)のことであり、洋行費ではなく、洋行の時期が尚早という異議を生ずるも、すでに板垣に謝罪し和解した(10月3日「自由」)と反論した。

IV. 同行者

板垣の洋行に同行する者は、後藤象二郎・今村和郎・栗原亮一の3人である。栗原は、中村敬宇に啓蒙思想や英学を学び、愛国社再興から自由党結成に関与した板垣の腹心であり、同行者として党外から批判を受けることはなかった。問題となったのは今村と後藤である。

「毎日」は、後藤・今村の2人は「平素君ト志節ヲ共ニスルノ人ニアラザルヲ見テ、愈々惑フ事ナキ能ハズ」と指摘する。

後藤は「商業ニ従事シテカヲ出シタル事ハ之ヲ聞クト雖、政治社会ニ奔馳シテ、自家ノ主義ヲ唱ヘタル事ハ之ヲ聞カズ。今又自由党ノ列ニアルニアラズ。是豈板垣君ト政治上ノ朋友ナリト云可シヤ」と、今村は「嘗テ仏国ニ遊デ、過激ノ自由説ヲ唱ヘタル事ヲ聞キシト雖、帰朝ノ後ハ闔トシテ其説ヲ聞ク事ナク、却テ今日ノ政府ト其説ヲ同シテ、大ニ信任ヲ得タルノ迹ヲ見ルナリ。況ヤ近日ニ至ル迄内務ノ要部ニ職ヲ奉ジタル人ナレバ、板垣君ト従来政治ノ交際アリト云フ可ラズ。又自由党ト関係アリト推断スル事ヲ得ズ」と板垣が自由党のために洋行するならば、同行者は自由党の有力者であるべきだという(9月24日「毎日」)。

それに対し、「自由」は、後藤は公式の場で党活動をしていないだけで、「本年自由党ノ臨時会ニ於テ副総理ニ撰挙セラ」れ、「自由新聞ヲ発行シテ、天下ニ自由ノ主義ヲ拡充セント企テ」た人物(9月29日「自由」)であり、また後藤が伊藤・井上と図り板垣を籠絡したという噂があるが、板垣の親友である後藤に限ってそのようなことはない。たとえ後藤にそのような思惑があったとしても、板垣が籠絡されることはないと反論した(9月27日「自由」)。

今村については、「如何ナレバ自由ノ主義ヲ懐ク者ハ、政府ニ立チ能ハザルノ道理アルカ…氏が自由ノ主義ヲ執リナガラ、職ヲ政府ニ奉スル事困難ノ場合ナキニアラザレバ、今回断乎トシテ冠ヲ掛ケ、去リタル迄ノ事」で、仮に今村を疑うならば、「日本立憲政党新聞」(自由党系・大阪で発行)の河津祐之や延いては「毎日」監事島田三郎にも及ぶだろう(9月29日「自由」)。またある党では「専制政府と始終共にする」とまで断言した人物が「一政党の頭役」と党衆に仰がれているので、今村などは怪しくも無い(9月26日「自由」)と、副党首河野⁽³⁵⁾を攻撃しながら反論した。

V. 帝政党の反応

板垣の洋行を、反対党である帝政党首福地源一郎（桜痴）は、「日日」で「大ニ随喜スル所ナリ」と賞賛した（9月30日「日日」）。しかし、この記事は改進黨から、「帝政党紙ハ、往々自由党ヲ目シテ逆賊トナシ、自由ハ国ヲ賊スル者トマデニ極論シタル頑陋輩ナリ。昨日ハ自由党ヲ以テ逆賊トナシ、叛乱党トナシ、今日ハ此党總理ノ洋行ヲ以テ近時ノ美事トナス。其心中推シテ知ル可シ」（10月1日「毎日」）と疑惑を受けることになる。

これに自由党は、「反対党が世の輕薄者流をして、疑惑を生ぜしめんが為にする所ありて然る者か、將た真に公平無私の心を以て、斯くは賛称したる者なるか我党の一向関せざる所なり」（10月3日「自由」）と返し、「日日」も「帝政党新聞ガ之ヲ祝スルハ、祝スベキノ理ヲ明言シテ、之ヲ祝シタルナリ。決シテ曖昧模稜ノ議論ヲバ為サルナリ」（10月3日「日日」）と反論した。これにまた改進黨は、帝政党が「之ヲ称赞スルハ自由党員ヲ離間シ、氏ガ名望ヲ滅殺スル所以也」と、人が洋行を疑うように仕向けているのだ（10月9日「報知」）と攻撃した。

帝政党が板垣の洋行を賞賛し、改進黨がその疑惑を指摘して以来、改進黨は論争の矛先を帝政党へ向けたように、自由党への攻撃を取めるようになる。こうして自由党と改進黨の論争はいつのまにか終わり、改進黨と帝政党の論争になる。

帝政党は「同業記者中、或ハ此事ニ就テ、種々ノ臆測ヲ逞クシ、陰ニ両君ノ名望ヲ傷ツクルアラントスルモノ」があるが、板垣・後藤の「二君ノ如キハ、維新ノ元勲、明治ノ功臣ニシテ、日本ノ宝トナル可キ人ナリト謂フベキノミ。吾曹ハ斯ル名望モアリ、経歴ニ富ム人ノ日本ニ多キヲ欲ルス者ナリ。豈ニ臆測ノ説ヲ喋々シテ、其令聞広譽ニ汚痕ヲ点破セント試ムルニ忍ヒンヤ」（9月30日「日日」）、「甲論乙駁、是非紛々、余輩局外者ヲシテ、其互ニ罵詈譏謗ヲ加ヘテ筆末ニ区々ノ論争ヲナスヲ見ルニ忍ビザラシメタリ」（10月3日「日日」）と、自由党や板垣を中傷する改進黨を非難した。

これに改進黨は帝政党紙である「明治日報」や「東新」が「讒毀嘲笑ノ語ハ、往々紙上ニ充滿」しているにかかわらず、「何ゾ自己ノ最モ親愛ス可キ同党ニ忠告セズシテ、之ヲ交リノ疎ナル反対党ニ向フテ喋々スルヤ」と忠告に名をかりて改進黨を誹謗しているに過ぎない（10月6日「朝野」）と反論した。また帝政党紙が「吾輩ヲ以テ此非行ヲ犯シタル者ト云ヘリ。記者輩ハ如何ナル確証アリテ此言ヲ犯シタル者」と、板垣の洋行について社説に述べたことは「我輩ノ疑ニアラザレバ、乃チ亦聞得タル事実ノ世ニ公ケニシテ、妨ケナキ所ノ者ナラサルハナカリシ。凡ソ人ノ疑心ヲ招クヤ、諸種ノ原因アリ。輒チ事ノ秘密ニ属スルヨリ招クアリ。或ハ強テ時機ニ背クコトヲ為スヨリ招クアリ。或ハ朋友宜キヲ得サルヨリ招クアリ。其ノ他時ニ依リ、人ニ由リテ、疑ヲ世間ニ招クノ原因ハ、決シテ鮮少ナラサルナリ…吾輩ヲシテ君ガ欧遊ノ事ニ関シテ疑ヲ懐カシメ、吾輩ヲシテ又此疑ヲ広ク江湖ニ質サシムルニ至」った（10月8日「毎日」）と主張した。

これ以後も、帝政党と改進黨は「日報及東洋両新聞記者ニ論ス」（「毎日」）、「奇ナル哉日報

記者)、「朝野」、「京横毎日新聞ノ蒙ヲ啓ク」(「東新」、「誣言ヲ弁ス」(「東新」)など、連載記事を書き、数回に渉り互いに中傷し合った。

おわりに

政府が板垣の洋行を計画した背景には、8年後に迫った国会開設がある。板垣を洋行させることで、板垣を感化させ、また黨員と切り離して民党の勢力を抑えようとした。

後藤が洋行計画に積極的に動いたのは、思い通りに行かなかった政党活動に見切りをつけ、伊藤・井上と謀り、板垣を洋行へ連れ出し、自分はそれを機会に、政府に復帰するためであったと考えられる。正直な性格の板垣は、後藤に押し切られ、深く考えずに承諾し同行しただけである。板垣にはどうしても洋行したいというような様子は見受けられず、ただ退く事ができない一心で馬場や大石の反対を押し切ったように思われる。

新聞紙上で改進黨が自由党へ向けた4つの疑惑は、「板垣が政府の関与の元で洋行するのではないか」ということにある。洋行の理由として、政府の懐柔策という推測に結びつき、改進黨に自由党批判の材料を与えてしまった。しかし、この論争は単に洋行問題の疑惑について言い合ったのではなく、背景には自由党と改進黨の対立があったことは明白である。

自由党と改進黨は、改進黨が自由党を「良友を以て自由党を待したり」(9月29日「報知」と、また反対党である帝政黨も「両党ハ小異コソアル可ケレ、其大目的ハ同ジク、急進ノ途ニ出ルモノナレバ、将来必ズ相連結ス可キノ性質ヲ含有スルモノナラン」(10月4日「日日」)と見ているように、民党である両党は合体の可能性を持っていた。しかし、これが遂に成り立たなかったのは、「入り組んだ諸種の事情」があったからである。

矢野文雄は、改進黨の党首である大隈は、14年までは政府の重役であったので、板垣をはじめ自由党の面々の議論や言動を否定的に論じていた手前、自由党と協力することができなかったという⁽³⁶⁾。一方で大隈は在官中、板垣を利用して伊藤らに対抗するつもりであったことが「政界四十年」に書かれている。大隈一派は板垣に提携を求めたが、「毅然として、渠は面さへ向けず断られ、板垣の「この時の態度は、実に見上げたものだつた」という。洋行問題で板垣と争うこととなる馬場が「板垣ならば事を共にするに足る、日本にこの人あらうとは思はなかつた、渠と共に政党団結に卒動しやうじやないか」と大石に語る⁽³⁷⁾ほどに、大隈は完全に撥ね付けられ、政府からも追放されてしまった。このことで、大隈は大いに板垣に対する感情を害したであろう。

また、副党首の河野敏鎌も、政府が板垣に対抗し得る勢力家としていた人物で、西南戦争では土佐で板垣の勢力を削ぐように働いたので、自由党の連中とは不仲であった。沼間は、かつて板垣率いる土佐藩兵と戦ったが、板垣に救われ土佐藩兵の軍事教練にあたり、のちに国会期成同盟の創立委員になり、自由党結成に関わったが、林包明など創立者との間で意見が合わず、改進黨に参加することになった。また河野と仲がよく、河野の肝いりで洋行したこともあり、

板垣や自由党に喜ばれない人物である。小野梓も同じく土佐の出身であったが、学者肌の文官で板垣の一派とは系統が違った⁽³⁶⁾。

このように、主に両党の有力者の人間関係に問題があったこと、また都市の有識者を基盤とする改進黨と地方を基盤とする自由党との不和のために、両党の合同団結は難しく、自由党と対立して改進黨へ参加した沼間の主宰する「毎日」が自由党攻撃の先鋒となったのである。また、自由党と改進黨の中には交詢社や共存同衆など、どちらかに属しながらも互いに交流するような者もあり、自由党の内訌などの情報が漏れやすい環境にあった。洋行反対の先鋒となった馬場は、まさに交詢社・共存同衆に所属し、改進黨と交流を持っていた。

改進黨が指摘した帝政党の反応への疑惑は、論争の矛先を帝政党へ向けるきっかけになった。この背景には、改進黨が「自由党を怒らせ大隈等の悪事を書立てられ候は甚迷惑」⁽¹⁰⁾なので朝吹英二を自由新聞社の古沢滋のもとに派遣し、和解を申し入れており、「東新」が「毎日記者ハ卑屈ニモ、自由新聞記者ノ憤怒ニ辟易シ、巧ニ阿諛ヲ呈シ其憤鋒ヲ鎮メ、此紛擾ヲ全ク局外中立ナル我党ニ譲ラント」(10月4日「東新」と指摘するように、自由党の板垣に対し、大隈・河野の活動が圧倒的に後ろめたく、自由党との対決を続けることが不利であると悟り、矛先を経営や経営者の経歴について潔白でない帝政党へ向けたのではないか。

また自由・改進黨の論争のとぼっちりを受けた岩崎が、後藤に泣きつき、自由新聞社に三菱の攻撃を辞めるよう交渉し、古沢に30万円を支払って辞めさせようとしたと⁽³⁸⁾いうので、岩崎が改進黨にも自由党との論争をやめるように頼み、大金を使って論争を收拾させようとしたことも考えられる。

改進黨と帝政党の間には、沼間が12年のアメリカ前大統領グラント夫妻歓迎会に反対し、福地と激しい論戦を繰りひろげ、この一件により沼間は新聞の必要を感じ、「横浜毎日新聞」を買収して東京で発行し、機関紙とした経緯もあり、「毎日」「日日」両社主の間の不仲もあった⁽³⁹⁾。しかし、両党の間で大きな対立をもたらしたのは15年7月の半官半民経営の共同運輸会社の設立である。政府は三菱の海上権独占を不可とし、大隈が大蔵卿時代から三菱に与えていた年額130万円の保護を中止し、共同運輸会社に交付した。政府は改進黨が三菱の保護を受け政府攻撃をするものと見做し、その糧を絶とうとした⁽⁴⁰⁾。また共同運輸会社には小室信介など自由党と縁のある人物も関与しており、16年以降の偽党撲滅運動へつながっていく。

〔注〕

- (1) 明治文化研究会編『季刊明治文化研究 第2輯』(1933) — 『尾佐竹猛著作集第2巻 憲政史6』(2006) ゆまに書房
- (2) 『日本史研究(75)』(1964) 日本史研究会
- (3) 『日本歴史(238)』(1968) 吉川弘文館
- (4) 『政治学論集22』(1985)、『政治学論集23』(1986) 駒澤大学

- (5) 宇田友猪『板垣退助君伝記 第2巻』[1929年春秋社刊] (2009) 原書房復刻、平尾道雄『無形板垣退助』(1974) 高知新聞社、絲屋寿雄『史伝板垣退助』(1974) 清水書院
- (6) 平塚篤編・伊藤博邦監修『続伊藤博文秘録』(1929) 春秋社 47頁
同書は、秘書平塚篤が伊藤家に残された書簡草稿・演説記録などをまとめ、新聞に連載した文章を単行本として刊行した書物。正・続二巻がある。
- (7) 徳富蘇峰「三代人物史」(昭和31年6月3日付「読売」)
以下に引用する新聞の原出典は以下の通り
「読売」(「読売新聞」DB「明治・大正・昭和の読売新聞」)
「自由」(「自由新聞」『自由新聞 [復刻版]』(1972) 三一書房)
「朝日」(「朝日新聞」MF「朝日新聞」朝日新聞大阪本社)
「毎日」(「東京横浜毎日新聞」『横浜毎日新聞 [復刻版] 第35巻』(1991) 不二出版)
「団珍」(「団団珍聞」『団団珍聞 [複製版] 第10巻』(1981) 本邦書籍)
「日日」(「東京日日新聞」MF「東京日日新聞」毎日新聞東京本社)
「報知」(「郵便報知新聞」『郵便報知新聞 [復刻版] 33』(1990) 柏書房)
「朝野」(「朝野新聞」『朝野新聞 [縮刷版] 16』(1982) ぺりかん社)
「東新」(「東洋新報」『東洋新報 [復刻版] 第48巻』(2007) 柏書房)
「時事」(「時事新報」『時事新報 [復刻版] 第1巻1』(1986) 龍溪書舎)
本文中では()内に紙名と日付のみ記入する。特に記さない限り明治15年。
- (8) 明治15年6月12日付伊藤博文宛岩倉具視書簡(伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書三』(1975) 塙書房)
この岩倉書簡は、次の5月3日付井上書簡と、内容的に連続するもの。
- (9) 明治15年5月3日付伊藤博文宛井上馨書簡(『伊藤博文関係文書 1』(1973) 塙書房)
- (10) 明治15年11月日欠伊藤博文宛井上馨書簡(『伊藤博文関係文書 1』)
- (11) 「留客斎日記」明治15年4月26日条(早稲田大学史編集所編『小野粹全集』(1982) 早稲田大学出版社)
- (12) 明治15年7月9日付小島竜太郎宛後藤書簡(松本三之介編『中江兆民全集 16』(1986) 岩波書店)
- (13) 今村は71年田中不二麿文部大丞に随行しヨーロッパに赴き、ついで洋行した際、兆民と親しくしたと思われる。(『中江兆民全集 16』)
- (14) 遠山茂樹・佐藤誠朗校訂『自由黨史 中』(1958) 岩波書店 207頁
- (15) 安永梧郎『馬場辰猪』[1897年東京堂刊] (1987) みすず書房復刻 137頁
- (16) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』(1935) 中央公論社 165頁
- (17) 「政界四十年」(大正4年5月14日「読売」)
- (18) 明治15年9月9日付伊藤博文宛山県有朋書簡(『伊藤博文関係文書 8』(1980))
- (19) 明治15年4月9日付井上馨宛福岡孝弟書簡(国立国会図書館憲政資料室蔵『井上馨関係文書』)

- (20) 明治15年9月14日付土倉庄三郎宛板垣退助書簡 (天理大学附属天理図書館蔵『土倉家文書』)
- (21) 『続伊藤博文秘録』49頁、樺山愛輔『父、樺山資紀 [1954年刊縮刷復刻]』(1988) 大空社 356頁
尚『自由党史』では、東京旧地方部員の臨時会の報告を受けた板垣が激怒し、馬場らを招集して17、18日に内訌が起こったとあり、政府側の史料と記述が異なる。
- (22) 「伊藤仁太郎氏談話速記」(広瀬順皓監修『憲政史編纂会旧蔵政界談話速記録第一巻』(1998) ゆまに書房 281頁、282頁)
- (23) 「板垣ノ自由新聞社改革ヲメグル政界密報」(国立国会図書館憲政資料室蔵『伊藤博文文書』—西田長寿編『馬場辰猪全集 第四巻』(1988) 岩波書店)
- (24) 明治15年10月18日付有栖川宮熾仁親王宛佐佐木高行書簡 (東京大学史料編纂所編纂『保古飛呂比 11』(1979) 東京大学出版会)
- (25) 板垣出発前の「毎日」10月5日、11月5日、「朝日」10月16日、11月1日、「読売」10月20日には吐血のみ、11月8日付伊藤宛中井書簡では「脳衝血症」とある。
- (26) 「伊藤仁太郎氏談話速記」(『憲政史編纂会旧蔵政界談話速記録第一巻』)
- (27) 矢野竜溪「大隈侯昔日譚 補」(1922) (早稲田大学史編集所編『大隈重信叢書第三巻 大隈侯昔日譚』(1969) 早稲田大学出版社 253頁)
尚「大隈侯昔日譚 補」を引用した馬場恒吾の『大隈重信傳』(1932年刊改造社)では「出所のあやしい金も受けずに」が「後藤からの金も之を受けずに」と書き換えられている。
- (28) 明治16年3月7日付伊藤博文宛西園寺公望書簡 (『伊藤博文関係文書 5』(1977))
- (29) 明治16年3月1日付井上馨伊藤博文書簡 (『井上馨関係文書』)
- (30) 板垣の見舞金は、明確に分るもので、天皇から300円、山内家から1000円、横浜英一番館の吉田兼造から100円(4月15日「読売」)の計1400円。不明なものまで挙げると、板垣が負傷したことを知った「君と郷土を同くし旧誼を存ずる者にて、手を束ねてたゞ座視すべきにあらず。聊かなりと贈物をなして君が患ひを慰めん」として後藤と岡本健三郎は有志の贈金を募った(4月11日「読売」)結果、板垣へ「慰問として諸有志より東京の自由党本部へ金円を送る者多き」(4月15日「読売」という。岐阜での負傷後、板垣の写真を買求める者が多く、どの店も売り切れになっていた(4月22日「時事」、15年4月26日「朝日」)ことや、少年ながら民権運動に参加していた伊藤痴遊が、当時の板垣について北越方面で遊説中に賽銭を投げられるなど「殆ど神ですな」(『伊藤仁太郎氏談話速記』247頁)と回想していることから板垣の人氣は察せられる。このことから板垣の見舞金の合計額は大金であったはずである。
- (31) 帰国後板垣は私立銀行資金の募金を行っており、この金は洋行費や負債の返済に充てられるという流言があった。(明治16年10月29日付佐佐木高行宛大脇之治書簡『保古飛呂比 12』)
- (32) 旧山内家の家臣など、高知県の民権家は政治活動費を山内家に求めることがあったようである。たとえば、自由党結成以前の明治14年8月下旬、立志社の大石や明治義塾の豊川良平は、高知県に共立学校を建てる計画を佐佐木へ持っていき、発起を依頼した。佐佐木はすでに高知県令

田辺良顕からも共立学校の話は聞いていたが、この学校が立志社の学校であると見て、婉曲に拒否した。しかし、山内家は「彼ノ徒ヲ恐レテ、遂ニ壹万五千金ダス筈ニナリ」と、立志社が山内豊範から援助を受けていたことが分かる。(『保古飛呂比 10』明治14年7月下旬条)

- (33) 『团团珍聞 [複製版] 第1巻』解説 11頁
- (34) 小野秀雄『日本新聞発達史』(1922) 大阪毎日新聞社 151頁
- (35) 9月28日、自由新聞社発起委員会議で、板垣は中江・林包明・西川通徹に向って、改進黨への非難をこめた発言をした。その中に「専制政府ト始終共ニ斃レンコトヲ盟フタル者ニシテ、一朝不平ヨリ退テ政党ニ入りタル者ハ今何レニ在ルカ、即チ汝ガ党ノ副首領タル河野ニアラズヤ」と言っていた。(「板垣ノ自由新聞社改革ヲメグル政界密報」)
- (36) 矢野竜溪「大隈侯昔日譚 補」(『大隈重信叢書第三巻 大隈侯昔日譚』247頁)
- (37) 「政界四十年」(大正4年4月28日「読売」)
- (38) 古沢は出来ない相談の積りで30万円を要求しており、岩崎の承諾に当惑したが「矢張其論主を変転するの意なきより遂に又一場の紛紜を惹起」したという。(明治15年11月日欠伊藤博文宛井上馨書簡『伊藤博文関係文書 1』)
- (39) 小野秀雄『日本新聞発達史』(1922) 大阪毎日新聞社 116頁
- (40) 三宅雪嶺『同時代史 第二巻』(1950) 岩波書店 179頁

(たなか ゆきの 文学研究科日本史学専攻修士課程)

(指導：青山 忠正 教授)

2011年9月29日受理

表

	自由党系	帝政党系	改進黨系
9月9日			報知(雑報) 今村、板垣らと洋行の噂
9月10日			毎日(雑報) 今村の進退と板垣洋行の疑惑
9月16日			団珍(風刺画) 「旨い露 水火の戦い」
9月24日			毎日(社説) 「板垣君ノ洋行」
9月26日	自由(社説) 「欧州漫遊ノ趣意書」(板垣退助、栗原亮一) 自由(雑報) 自由、毎日に反論 自由(雑報) 「板垣退助言行録」		
9月27日	自由(社説) 「社長板垣ノ西遊」(中江兆民)		
9月29日	自由(論説) 「東京横浜毎日新聞ヲ読ム」		報知(雑報) 自由に反論
9月30日		日日(社説) 「板垣後藤両君ノ洋行」(福地桜痴)	
10月1日			毎日(社説) 「再論板垣洋行」
10月3日	自由(雑報) 毎日に反論	日日(投書) 「反对新聞ノ闘争」(小山重策)	
10月4日	立憲(社説) 「政党ノ争轢」	日日(社説) 「反对党ニ望ム」(福地桜痴) 東新(社説) 「近来ノ一事」	
10月5日		日日(投書) 「板垣退助君ノ洋行」(山下八郎)	
10月6日		日日(投書) 「読東横毎日新聞」(桜井淡三)	毎日(社説) 「日報及東洋両新聞記者ニ論ス」 朝野(雑報) 「奇ナル哉日報記者」
10月9日			報知(社説) 「帝政党近日ノ挙動ヲ論ス」
10月10日		東新(社説) 「京横毎日新聞ノ蒙ヲ啓ク」	報知(社説) 「反对党近日ノ挙動ヲ論ス」
10月13日		東新(社説) 「誣言ヲ弁ス」	
10月24日	自由(社説) 「自由党ト改進黨トノ関係ヲ明カニス」		
11月10日	自由(寄書) 「板垣君ノ(以下判読不能)」(細川瀧)		
11月13日		日日(社説) 「板垣君ノ洋行」(福地桜痴)	

※「自由」(自由新聞)、「立憲」(立憲政党新聞)、「日日」(東京日日新聞)、「東新」(東洋新報)、「報知」(報知新聞)、「毎日」(東京横浜毎日新聞)、「朝野」(朝野新聞)

※太字は連載されたもの。